2023年度 第4回森と水の源流館授業づくりセミナー 概要報告

奈良教育大学　中澤　静男

◇開催日時　　８月26日（土）10時～12時45分

◇方法　　ZOOMを用いたオンライン方式

◇参加者

現職教員：中本（田原本小）、新宮（奈良女子高校）、阿部（山形市立千歳小）、近野（天童市立寺津小）
橋本（福岡市）、中谷（和歌山大学附属小）、加藤（川上村役場）

学生　　：田畑、木村、芝田

スタッフ：尾上、成瀬、上西

大学　　：大西、中澤　　計15名

◇内容：現職教員の学習指導案の相互検討会

１．「海の豊かさを守ろう」近野先生（天童市立寺津小学校４年生　総合的な学習）

地域の特徴：最上川水域にあり（須川、寺津沼）、農業が盛んな地域

児童の実態：表現力を高めることで、自尊感情を育てたい

授業実践の背景：社会科での「水はどこから」の学習　川ゴミに気づく
ネイチャーセンターとの連携で湧き水の学習、水田の役割（緑のダム）を学ぶ
→　水田に関わるテーマを設定し総合的に学ぶ機会としたい

海洋政策研究所との連携で海ゴミに関わる学習や、それを防ぐ取り組みがあることを知る
→　自分たちも海洋に関わる学習をやってみたい　→　学習テーマの設定へ

・自分の生活とつなげて問題を考えることができる子どもを育てたい
自己のライフスタイルを見直す機会に、企業の取組にも関心が向くように

体験的な学習活動：寺津沼の掃除をしてみよう
鶴岡市役所（海ゴミ対策をされている）への協力依頼
→　鶴岡市の学校（下流の小学校）を紹介していただく

児童主体の学習に：外部とのコミュニケーションの窓口として実行委員会を設置する（４名／８名）

【相互検討】

①導入が丁寧で、子どもたちの思いを受け止めた授業実践になっている
子どもの反応を想定して、子どもが楽しめそうな取組を計画している
外部機関との連携でコミュニケーション力も育つ

②海を意識化するために
実践の途中で海を意識化させる手立てがある
夏休みに海に行った感想の交流　　社会科での水の実践
海が近い学校（鶴岡市の学校）との交流

③地域の外部機関との連携のきっかけ
フットワークを軽くする
早く子どもの反応を想定し、計画修正しながら外部機関と連絡を取り合いながら子どもの反応と外部機関に協力してもらえそうなことを合わせていく。

２．「すばらしき奈良公園を発信しよう」新宮先生（奈良女子高等学校：探究）

川上村で実践されている吉野川の保全活動から学ぶ

川上村のポスター
　川上村では河川敷や山林周辺において以下のことをしないでください！
　①火気の使用、②ゴミの放置、③水をよごす行為
　「『川上宣言』を掲げ、「水源地の村づくり」に取り組んできた川上村では、2009 年から「川上村環境基本条例」を制定し、すべての人に自然環境保全の意識と配慮ある行動を求めています。

◎市民参加の重要性を源流館から学ぶ（行政の取り組みだけでは改善できない）
→　奈良公園のシカに関わる問題を取り上げ、自分たちにできることを考えていく。
【相互検討】
①発信対象に関して
　奈良市民はシカとのつきあいかたはよくわかっている。問題行動をするのは外から来た人
　川上村においてもバーベキューなどで河川敷をよごしたり、ゴミを放置したりするのは外から来た人
　→　発信は観光客に対してするべきだろう
②発信方法に関して
　観光客に対する発信　　企業と連携し、チラシを広告に入れてもらう
　　宿泊ホテルに置かせてもらう
　　海外の人が使うアプリで発信する
　　シカ募金-販売機に掲示する
　　女子高生が得意なイラストを使用する

３.「千歳地域の特色は何かを考えよう」阿部先生（山形市立千歳小学校４年生総合的な学習）
　３年生時の栽培活動の失敗から　枝豆栽培のリベンジ　→　豆豆リベンジャーズ
　リベンジャーズの活動の一環で農家の方に指導していただく　その方は実は里芋農家
　日本一の芋煮会で食べられているのが千歳地域の里芋であることを教わる
　千歳地域の特色ある農産物が里芋であることを知る
　→　地域のために自分たちの里芋を育てて、コミュニティセンターのお祭りで、地域の人たちにおいしい芋煮を食べてもらおう
　千歳地域の里芋がおいしい理由　水質がいいのではないか
　　→　山形県環境科学研究センターの濱田さんに馬見ヶ埼川について教わる
　山形市農政課に協力依頼し、千歳地域の土壌について情報提供を受ける
　地域めぐりウォークラリーの実施し、川ゴミがあることに気づく
　　→　美しい山形クリーンアップキャンペーンに参加する
　最上川下流域にある酒田市立浜中小学校との交流　（10 月 22 日の山形ＳＤＧｓ活動発表会で発表）
【相互検討】
①交流について
　芋煮に海の幸を入れるということにして、海との連携を計画してもおもしろいのではないか
②発信について
　発信にはメディアとつながって広く発信することと、身近なところで詳しく発信することがある。

大事なのは子どもの変容であり、地域社会の変容であるから、発信方法や場所などを考慮する。

４．「プロジェクトＱ　シンギョロッケ誕生ストーリー」橋本先生（福岡市立小学校５年生総合）

ギョロッケの価値

・給食でブリの切り身が提供できるようになったが、廃棄する部分が多く出ている

　→　未利用部位を使用したい

・給食でのブリ提供に関わる人々にＧＴを依頼し、出会いの場をもつ

　漁師、加工業者（アキラトータルプランニングの博水さん）、流通（運搬業者）

・水産物提供に関わる苦労を知る

・福岡県の漁業の課題を知る

　→　ギョロッケを食べることがそれらの人々を応援することになることに気づかせる

　→　９月末にはギョロッケを給食で提供する

【相互検討】

①座学から入るのではなく、まず「ギョロッケを食べる」ことを学習のスタートにすることで、子どもたちの学習意欲の向上につながるのではないか。

②未利用部位やフードロスに対する漁師さんの思いを聞き取ることが子どもの意識を変える

③ギョロッケへのわくわく感を高めるために、校内放送や掲示板を活用する

④今回の学習を契機に①自分のフードロスを記録したり、他教科とのつながりを考える

５．「幸せな社会を目指し、知恵と力を合わせる」中谷先生（和歌山大学附属小学校３年生社会科）

中谷先生の社会科学習の基本コンセプト

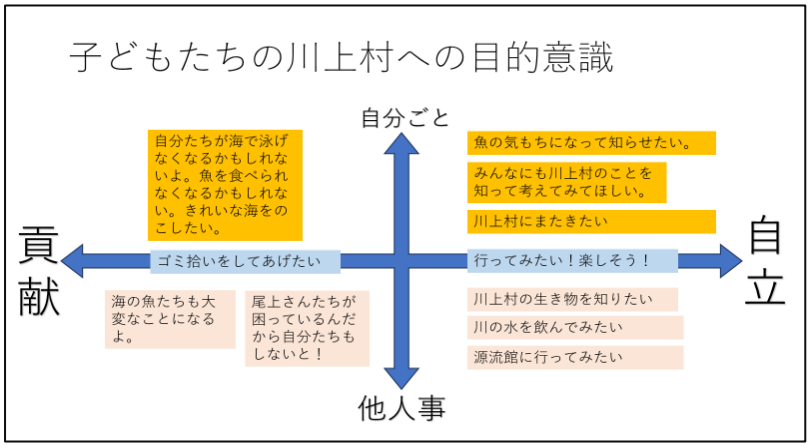
まちや仕事を調べる

まちや人を好きになる

幸せな社会を目指し、知恵と力を合わせる

３年生の社会科と総合で

知る・好き・協力



まちのために頑張っている人、仕事を頑張っている人との出会いから、課題に対する自分事化を促し、さらに現地で学ぶことで、行動化を促す。